

よりあいつうしん

発行元

宅老所よりあい

つうしん課

〒814-0104

福岡市城南区

別府7丁目

9-22

Tel.092-845-0707

よりあいの森にて初となる「マルシェ」を開催！

「よりあいの森カフェ」は、四月より名前も営業日も新たにスタートしました。その名も「喫茶ヨリーネ」。第一、第三木曜日の十三時から十六時の間営業しています。名前の候補はよりあいの職員から募集し、多数決により決まりました。発案した職員に理由を聞くと「なんかフランス語みたいでしょ」とのこと。そして、その「ヨリーネ」を中心に、初の「よりあいマルシェ」を開催いたしました。よりあいの森では久しぶりの地域に向けた催しです。

当日の天気は澄み渡る青空。会場には予想を上回る多くの人々が詰めかけていました。準備していたランチのお蕎麦五十食はすぐに完売。物販コーナーには定番の手作りのジャムと、ガリックオリーブオイル。そして、新商品のお年寄りの似顔絵をプリントしたティッシュケースやコースターなどを販売しました。また、コーラスやバンドによる生演奏が会場をさらに盛り上げてくれました。かなりの盛況ぶりに、職員は慌ただしく動き回っていました。そして、多くのボランティアの皆さんのご協力があり、初めてのマルシェは大盛況のうちに幕を閉じました。

そんな中驚く場面がありました。入居者のケイコさんが地域の方とテーブルを囲み、お菓子をつまみながら談笑していました。はじめは知り合いの方かなと思いましたが、ケイコさんが住んでいたのは福岡県南です。この近所に知り合いの人がいるとは思えませんが、しかしそこには、たわいもない会話や笑い声が生まれていました。ああなるほど、お年寄りにはこんな一面もあるのか、地域の方々と交わるとこんなにも活き活きとした表情をされるのかと気づかされました。

施設の中だけでは、ほとんど職員としか関係がありません。その光景を見ると、改めて地域との繋がりが大切なのだと思えました。

ちなみに、「マルシェ」とはフランス語で「市場」という意味だそうです。「ヨリーネ」で「マルシェ」の開催……。いろんな人が集まり、交わる、そんな催しに今後もしていきたいです。



7月28日(土)17:00~21:00
納涼祭開催!!

次回マルシェ
9月開催予定!!

ぜひ遊びに来て下さい!!

ショートステイと向き合って

ショートステイ（短期入所生活介護）は利用者の心身の機能維持並びに、利用者家族の病気や冠婚葬祭、出張や身体的及び精神的負担の軽減の為の制度です。特別養護老人ホームのよりあいの森にもショートステイの部屋が二床あります。ショートステイの受け入れ方で私たちはとても悩んでいます。介護を提供する前に、どんな風に関係をつくり私たちを受け入れてもらえるか、緊張と戸惑いの連続です。

今回は、よりあいの森のショートステイでの話を紹介します。

おじいさんは初めてよりあいの森のショートステイへやってきました。慣れない場所に戸惑い気味のおじいさん。お茶でも飲みながら話をすれば徐々に打ち解けてくれるだろうと思っていました。が、なかなかそうはいきません。しかも、一階に入所されているお年寄りは全員が女性。職員もなんとか安心してもらうと関わりますが、お互い固い表情のまま時間だけが過ぎていきます。

そんな中、おじいさんが生き生きと話をされる場面がありました。それは、十代の頃に会社の寮に住み込みながら働き、夜は夜学に通っていたころの話です。「豆炭や大きな氷をお店に運ぶ仕事の後に、疲れた体で勉強するのはとても大変だったよ」と、その軽妙な話しぶりに、周りのお年寄りも職員も引き込まれていきました。

まだ緊張がとれないまま、お昼ご飯を済ませ、海を見にドライブへ出掛けることになりました。外に出て、綺麗な景色を見ておいしい空気を吸い込めば、きつとおじいさんの緊張もほぐれてくれるかと思つたからです。しかし、その道中なかなか会話が弾みません。変に質問攻めのようになってしまう、かえっておじいさんを疲れさせてしまったようでした。ただ、一面に広がる真つ青な海を見た時には、「きれいだねー気持ちいいね」と満面の笑みで言っていました。

ドライブも終わり、再びよりあいの森へ帰ってきました。まだまだ固い表情のおじいさんを、ひとまずお部屋へと案内します。しばらくして、職員も部屋に入って行きます。外はすっかり夕暮れ時。「今日はもうこれで帰ります」なんて言われたらどうしよう。緊張しながらおじいさんの様子を伺います。その時でした。おじいさんは自分の荷物を眺めながら、「今日はここに泊まるんかね？」と尋ねられます。「今がチャンス」職員は「こぞとばかりに」そうですよ。ちょうど夕食もできたので、一緒に晩酌しませんか？とお誘いします。そういえばドライブの帰り道、「芋焼酎のお湯割りを一対一で割って飲むのが好きなんよ。酒の肴はキムチがいいね」と教えてくれました。そのことを他の職員に伝えると、すぐに厨房まで走ってくれキムチ大根を準備してくれました。あつという間に晩酌の準備は整い、おじいさんも芋焼酎とキムチに「最高！」と言って、無邪気な顔で笑っていました。そして、無事に次の日の朝を迎えることができました。

私たちは戸惑いながら、このショートステイという制度と向き合っています。そして、よりあいが大切にしてきたことを再度確認合っています。ゆっくりと関係性を築いていくこと。隣に座っておいしいお茶を飲むこと。そこからのスタートだなと感じています。馴染のある人、少しでも自分の話を教えてくれるようになった人、まったく初めての人。どんな人かなと思いを巡らせます。どんなにその人の情報が書いてある紙を読んでも、その人の人柄は分かりません。実際に顔を合わせて「こんにちは、初めまして」から、ドキドキ、ワクワク、緊張の一日が始まります。

ショートステイを利用される多くの方は、自宅で過ごすことを望んでいます。ただ、介護している家族にも休息が必要です。共倒れしてしまつては元も子もありません。通い慣れ、馴染みのある場所に泊まるのが最低限担保できればいいのですが、ショートステイという制度では、一番大事な関係性を飛び越えて「泊まり」を支援しなければなりません。まだまだ課題の多い制度だと感じています。私たちはよりあいの森のショートステイがいい方向に進めるよう、みんなで話し合いながら取り組んでいきたいと思っています。

よりあいの森

中島 静

アツシさん、いなくなる

十二月二日の朝、いつものように出勤すると何か様子がおかしい。「アツシさんがいない!!」

アツシさんは第2よりあいの建物の周りを掃除するのが日課。この日も朝から掃除をしていた。職員が最後にその姿を確認してから二十分は経っている。すぐに二名が探しに飛び出した。

「そんなに遠くには行ってないだろう。すぐに見つかる」。そう思っていたが、十分、二十分と時間が過ぎていく。「まだ見つからない…。どうしよう…。他のお年寄りの迎えも行かなくちゃ」。グルグル回る頭の中を必死で整理していた。

休みの職員も緊急招集。通所の対応と探す人員を振り分ける。娘さんに報告。特養にも応援を頼んだ。

私は娘さんと一緒に警察署へ捜索願を出しに行く。警察官からアツシさんの日頃の様子やいなくなった時の状況などを聞かれた。娘さんも不安なはずなのに、気丈に明るく「大丈夫ですよ。きつとよりあいの近くを歩いていると思います」と職員を気遣って下さる姿に本当に申し訳ない気持ちで一杯だった。

アツシさんがいなくなったのは初めて。正直、目的も行動も行きそうな場所も想像がつかない。時間が過ぎていく程、最悪のシナリオが頭に浮かんでくる。

アツシさんの心配と事業所としての責任の重さ。そんなことを考えながら都市高速下のアツシさんの自宅とは逆の方向に車を走らせ、ホームセンターの方へ左折。その瞬間、見覚えのある後ろ姿が私の目に飛び込んできた。背中を丸めトボトボと歩いている。車の窓を開け叫んで呼び止め、アツシさんの元へ駆け寄る。「良かったー」と、泣きながら抱き着く私に「えっ?」と驚いた表情のアツシさんだったが、何かを感じ取ったのか「すみませんね」と笑った。

振り返るとアツシさんの小さな変化には気づいていたら、いなくなることは予期せぬ出来事ではなかった。しかし、どこかで「アツシさんなら大丈夫」という過信が、気づきを支援に変えられなかったのだと思う。

今後もしなくなる可能性はある。どうやって見守っていくのか。アツシさんの日課の掃除はこれからも大切にしていきたい。

今は職員も一緒に掃除をするようになった。また、地域の人にアツシさんを知ってもらえるよう地域の茶話会へも参加している。アツシさんが自由に掃除出来る様に支援をしていきたい。

第2宅老所よりあい

末吉 倫子

見えてきたもの

こんにちは。昨年の十一月より、一階から二階の勤務へと異動となりました。佐藤といいます。よりあいの森に勤めて四年目になります。

一階にはエミコさんというお年寄りがいらつしやいます。施設長など、肩書きのある方を特にたてる方です。それに対し、社会人一年目の二十歳の私。孫と同じくらい歳の離れている小娘に、身の回りの手伝いをされたくないのはわかります。何度お願いしても怒られてばかりで、葛藤の日々でした。

私がトイレにお誘いしても「あなたとは嫌です」と断られ、後から誘った職員と行かれたこともありました。着替えることも、お風呂に入ることも、私とでは上手くいきません。なんとか着替えの手伝いをやらせてもらえる事はあっても大きな声で怒られる始末。つい私も怒ってしまい、言い合いになって最後に「ごめんさい」と謝り合う。優しい雰囲気と相性が良いことがわかって、おしとやかに接してみるが「気持ち悪いね」と冷めた目で見られ逆効果。私も自分として接していないので気持ちが悪い。エミコさんとの思い出はこんなことの連続でした。

ある日の夜勤のこと。エミコさんが私を部屋に呼ばれたことがありました。「何を言われるのだろう」恐る恐る部屋に入りその場に座ると、エミコさんも膝を突き合わせてこう言われました。「やっぱね。どう考えても佐藤さんとは合わないんです。」

急な言葉に驚きながらも、

「それは私も感じています。おしとやかにはなれません。」

私がそう答えると、

「仕方ないね」

と、笑われて布団に入られました。

そして、二階への異動。そこで初めて関わったお年寄りとの話です。朝起きてからおうと部屋に入ります。すでに目が覚めておられたので「おはようございます」と声をかけます。しかし、聞く耳をもたれず怒った表情で何も答えてはくれません。目を合わせるのさえ難しい状態。あれ?あれ?どうしたらいい?何が嫌なのかわからない。怒りながらも着替えに付き合ってくれるわけでもない。気持ち悪いとは言われないけど、私を見てくれている訳でもない。「ああ、エミコさんだったらちゃんとどこが嫌とか他の職員呼んでとか言ってくれるのになあ」と。職員として私の方がエミコさんに付き合っていたつもりが、実は付き合ってくれていたのはエミコさんの方でした。

一階のお年寄りと二階のお年寄り。いろんな方がおられます。一つ一つの関わりを楽しんでいる時もあるし、辛いや言を言われ、つい言い返してしまったり、しんどくなってしまう時もある。自分はどういう人間かが見えてきます。お年寄りにかける言葉にその人の個性が出ます。良いところも悪いところも含めてむき出しにさせられる、そんな介護に日々翻弄されています。



よりあいの森

佐藤 詩織

編集後記

日本陸上男子400mリレーの華麗なバトンは、他の国の強靱な足の速さにも負けない技術がある。

「鐘ヶ江さんに次の編集長お願いしてもいいですか?」

「あ・・・はい」

こんなかたちでバトンは回ってきた。もちろん助走なんかとる暇はなく、非常に窮屈な姿勢で受けとるかたちとなった。そこには華麗さのかけらもなかったように思う。しかし、バトンを受け取ったからは前を向いて走り出さなければならぬ。発行予定日は、もうそこまで来ていたのだった。

というわけで、今回の「つうしん」より編集長を務めることになりました。鐘ヶ江です。まず、今回の「つうしん」の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

編集長を務めることになりましたが、特段文章を書くことが得意なわけではありませんが、しかし、「よりあい」で起こっているお年寄りと職員の出来事を知ってもらいたい、発信したいと心から思っております。

これからも、みなさんの力を借りながら一つ一つ丁寧に発行していきたいと思っております。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

よりあいの森

鐘ヶ江 亮一

ホームページにて

ブログ更新中!!

お年寄りと職員の日常をゆる〜くアップしております。あんな話や、こんな写真がみれるかも!ぜひ、覗きにきてくださーい。

宅老所よりあい

検索

HP : <http://yoriainomori.com>